「ボランティア考～共に成長する」

●永六輔（えいろくすけ）さんの「視点・論点」

「最近、ボランティアのあり方が変わってきているのが気になりますね。
阪神淡路（あわじ）大震災（1995）では、ボランティア元年（がんねん）という言葉が生まれましたが、その頃、行政の側に、まだそれを受け入れる仕組みがなかったんです。
福井県三国（みくに）の海岸でタンカー重油流出の時（1997）には、『大勢のボランティアが寒い海岸で座って油をすくう作業は痔になる』と診療するボランティアのお医者さんまでいました。
ところが、長野オリンピック（1998）では開会式に、小澤征爾さんの指揮で、『第九』の合唱を歌うボランティアの人たちに入場券を買わせようとしているんです。
一生懸命やっている行政を補うこと、それがボランティア。足りないところを補うのは、義手、義足、義眼、そして、義勇軍も同じ。
行政を冷静に見て、補うボランティアには、批判する眼がないといけない。ところがこの頃、行政がボランティアを最初から当てにしているのはどうなんだろう。」（抄出）

以上、NHKで当時（1997）放映された永六輔さん（1933～2016）の「視点・論点」の一部です。
最初から、ボランティアを計算し、確保し、利用するのでは、いつの間にか、ボランティアが行政に組み込まれてしまうというわけです。ボランティアとは、自分の意志です。だから、頑張っている行政のために、ここを補ってあげようという展開が大切だというのです。

●教育現場の「奉仕」

昨年2020年7月、東京でオリンピックが開かれる予定でした。
大会組織委員会と東京都は、開催前から、11万人規模の無償ボランティアを募集していました。年齢層も幅広く、中高生6千人の募集を考えていたこと、任意参加といいながら、学校ごとに割り当てがあり、半強制的な参加を求めていた学校もあったと報道されました。
2000年12月、森内閣の教育改革国民会議が、小中高校生全員に、「奉仕」を行うよう提言しました。しかし、内閣法制局から憲法十八条「苦役（くえき）からの自由」に反すると指摘され、翌年の学校教育法改正では、「ボランティア活動などの社会奉仕体験活動」の「充実に努める」と規定されました。しかし、この名称は本来のボランティアとズレた使い方ですね。
2007年、第一次安倍内閣の教育再生会議は、「すべての子供に規範を教え、社会人としての基本を徹底」、「高校で奉仕活動を必修化する」と提言し、それを受けて同年、石原都知事（当時）の下、都立高校では「奉仕」科目が必修化されます。
元文部科学官僚の前川喜平さんは、「どんなに立派な活動でも、強制されれば『苦役』だ。ボランティアの名の下に中高生に苦役を強いてはならない」といいます。（東京新聞、2019年11月17日）

●学徒動員という思い出

今、コロナ禍の影響で、小中学校では、運動会も、遠足も、学芸会も、修学旅行も中止され、思い出に残る行事が減っています。
私の母は、1930年生まれで、戦争中、女学校を過ごした世代です。当時、学徒動員で、畑を耕したり、海軍水路部の計算をした思い出をよく語ってくれます。学徒動員とは、昭和の十五年戦争末期の1943年以降、深刻な労働力不足を補うため、中等学校以上の生徒が政府により、食料生産や軍需産業に強制的に駆り集められたことをいいます。
今、文部科学省は、小学生に、夏休みの炎天下でも安全安心だから、思い出作りのため東京オリンピック観戦を要求しています。都教育委は、観戦しない児童を欠席扱いするそうですから、これは「動員」といえそうです。
同じオリンピック大会に向き合う時も、因縁の巡り合わせによって、私たちに与える影響は大きく変わります。
東京のある寺のボーイスカウトに、沿道で聖火ランナーの声援をさせる計画がありました。関係者は当初、問題にしていませんでしたが、スカウト自身やその保護者には、大会開催賛成の人もいれば、反対の人もいるという基本的な認識を忘れていたことになります。同じ大会も、人びとの心に大きな違いを生み出すという当たりまえのことを忘れずにいたいと思います。

●菩薩の精神

ボランティアは、自発的という意味です。割り当てられたり、忖度（そんたく）したうえの行動ならば、自分も、他者も、その人間成長にはつながりにくいものです。
宮沢賢治は、熱心な仏教徒でした。「雨ニモマケズ」で、「病気ノコドモ」「ツカレタ母」「死ニサウナ人」「ケンクヮ（喧嘩）ヤソショウ（訴訟）ガアレバ」といって、人々の悲しみ苦しみに心を寄せる心情を語りました。
アミダさまは修行時代の名前を法藏菩薩といい、迷い苦しみ悩む人々に、真理の世界、すなわち、仏の国、浄土のあることを示して、気づかせよう、救おうと誓いを立てます。
いずれも大乗仏教の菩薩の精神の表れです。
他者の苦しみを人ごととせず、まさに自発的に自分に引き当てて行動しています。そのことが自他共に成長する道であることを教えてくれます。
ボランティアを巡る状況に、永六輔さんは今ごろ草葉の陰で歎いているでしょうか？　いやいや、浅草の真宗寺院に生まれた永さんは、往生浄土する人生を歩まれたと思います。それこそ、われひと共に成長して救われていく、菩薩のはたらきを今ここにして下さっていると思います。

合掌
万行寺第十八世住職　釋靜芳（本多 靜芳）

※ご縁のあったあなた！　第一水曜午後四時から六時の法話会「ナムの会」で『親鸞様・御和讃』を、偶数月第三水曜午後六時半から八時半の「聖典勉強会」で『親鸞様・御手紙』を学びにいらっしゃいませんか？　お待ちしてます（会費はいずれも資料・茶菓代として千円です）。
「ナムの会」は一月と十二月は休会します。